

I 研究の概要

学校教育目標 未来を拓く 心豊かな 南っ子

明日も行きたくなる学校

研究主題

自分や友達の大切さを認め合い、互いに高め合う児童の育成
～「学びに向かう力」を育む土壌づくりを通して～

研究仮説

人権教育の視点に立って教育活動を工夫していけば、児童一人一人の自己肯定感が高まり、主体的に学習に向かい、互いに高め合う児童を育成することができるであろう。

めざす姿

児童

- 最後まで諦めず丁寧に取り組む。
- 自分事として、相手の思いを汲み取りながら話を聞く。
- 自信をもって自分の思いや考えを表現する。
- 友達の思いや考えを受け止め、認め合える。

職員・学校

- 高い人権感覚を身に付けられるように研修を重ねる職員。
- 児童一人一人を細やかに見取る職員。
- 人権についての知識、実践力や指導力を身に付けた職員。
- 児童が安心して学習できる学校。

人権教育の視点に立った「学びに向かう力」を育む土壌づくり
(授業・授業以外の活動・環境)

「人権が尊重される授業づくりの視点」を位置づけた授業

聞く・話す力の向上に向けた取組

ユニバーサルデザインの視点に立った環境整備

振り返りの充実

生活目標の指導の工夫

人権学習

児童会活動の工夫

地域との関わり

教職員の研修(児童理解・人権など)

児童や学校・職員の現状や課題

Ⅱ 研究の実際

「人権が尊重される授業づくりの視点」を位置づけた授業

- 人権教育の指導方法等の在り方について「第三次とりまとめ」（人権教育の指導方法等に関する調査研究会議）に示されたものをもとに、視点を整理し、授業づくりに役立てた。

人権が尊重される授業づくりの視点～南小バージョン～ 2023. 12. 25 作成

視点	ねらい	南小学校が大切にしたいポイント
視点Ⅰ 自己存在感を 支援を工夫する 持たせる	「授業に参加している」という実感を持たせる。	① 児童の既習事項や生活体験、興味・関心等を把握し、目的意識や相手意識を持って学習できるようにする。 ② 単元を通した学習計画や授業の流れを明示し、見通しと安心感を持って授業に参加できるようにする。 ③ 児童の実態に応じた思考過程や学習過程を認める。 ④ 学習過程の中に、学習を振り返る機会を設定する。
	「自分が必要とされている」という実感を持たせる。	① 自由な発想や方法が認められ、自己選択ができる場を設定する。 ② 互いの発言を最後まで聞く習慣や誤答を大切にすることを身に付けさせる。 ③ ペアやグループで協力して活動できる場を工夫し、お互いの考えや方法のよさに気付かせる。
	教師自身が一人一人を大切に する姿勢を示す。	① 児童の発表をしっかりと聴き、認める。 ② 児童の実態把握の上、個に応じた適切な学習支援を行う。 ③ 児童の実態に配慮し、計画的な机間巡視を行う。（ノートやワークシートのチェック→○付け、シ

- 学習指導案に、「人権教育の手立て」を明記し、授業づくりを行った。

4 人権教育の手立て

視点	ねらい	単元を通した手立て (本時における重点的な指導の手立ては網掛け)
自己存在 感を持 たせる 支援	「授業に参加している」という実感を持たせる。	A 既習事項を掲示し、児童が活用できるようにする。 B 児童の実態に応じ、数図ブロックや図などを活用する場を設ける。
	「自分が必要とされている」という実感を持たせる。	C ペアやグループで協力して活動できる場を設ける。

5 指導計画（全 10 時間）

小単元	時	おもな学習内容	手立て
	1	・操作や図を用いて、13－9の計算の仕方を考える。	B C E F G H

3 本時の展開

過程	学習活動	指導上の留意点・評価・手立て
	1 本時の学習問題をつかむ。 どんぐりが13こあります。	○ 既習の減法計算を振り返らせる。(A) ○ 学級全体で問題文を読み、出てきた数に○、大切な言葉に線、聞かれていることに波線を引かせる

- 全体授業後には、授業研究会を行った。学習指導案に示す「本時における人権教育の取組」を2つに絞り、参観時や協議の際の焦点化を図った。

今年度はさらに「4 5分間で見せたい子供の姿」として「①自分の考えを確立し豊かに表現する姿 ②他者の考えのよさを学ぶ姿 ③自他の大切さを実感して学ぶ姿」の3点を意識して授業づくりを進めた。

<実践例>

第2学年 算数科「ひき算のひっ算」

本時の学習	目標 筆算形式による2位数－1、2位数（繰り下がりあり、空位、欠位あり）の減法計算の仕方を理解し、答えを求めることができる。 本時における人権教育の取組 ○ ペアやグループ活動において、互いの説明を見たり聞いたりした後にシールを貼って意思表示ができるようにする。 ○ 児童が自分の目標に合った問題数を選べるワークシートの工夫を行う。	
成果	シールを用いることで発表することへの意欲が高まった。シールを貼る際にはどのような言葉を掛けるとよいか、児童と話し合いを積み重ねたことで、安心してグループ活動を行う姿が見られた。また、取り組む問題を見ることができたことで、意欲的に学ぶ姿が見られた。	まず、一の位を計算します。 よくわかったよ。

振り返りの充実と、聞く・話す力の向上に向けた取組

授業で振り返りを書く際のヒントカードとしたり、児童に振り返りの視点を与えたりするため、「わが友や表」を作成した。活用を続けたところ、表を見なくても振り返りが書ける児童が増えた。また、自分が何ができるようになったかを確かめたり、授業における友達との関わりを目を向けたりすることができるようになった。

また、友達の思いや考えを受け止める児童を育てるために、「聞き方・話し方スキル表」を作成した。これにより、授業における話し合い活動などにおいて、教師が身に付けさせたい力を児童に明確に示すことができるようになった。発表する際の声の小ささは、本校児童の課題の一つのため、適切な声量で話すといった基礎的な指導にも役立てている。

・一番伝えたいこと
・言いたかったこと
・たぶん～かな

・自分の考えと同じ
・○さんは～と言
・○さんと○さん
ちがうから

児童会活動



聞き方・話し方（高学年）

- ・一番伝えたいことは～
- ・言いたいことは～かな
- ・たぶん～かな

- ・自分の考えと同じだな
- ・○さんは～と言ったけど
- ・○さんと○さんは考えがちがうから

児童会活動の工夫

縦割り班活動

縦割り班活動

1～6年生の縦割り班を編成し、縦割り班活動を行っている。毎週金曜日には清掃を行っているほか、月に一度は6年生が企画・運営した遊びを行い、異学年交流の機会の一つとしている。縦割り遊びの日には、互いに名前呼び合えることができるよう、名前を大きく書いた専用の名札を身に付けている。

長縄大会

長縄大会

体育委員会が主体となり、昨年度から「長縄大会」を行っている。大会当日に向けた学級の出組を通して、友達を思いやることの大切さや、みんなで力を合わせることのよさ、達成感を味わうことができた。「仲間づくり」の一つの手立てとなった。

なかよしフラワー

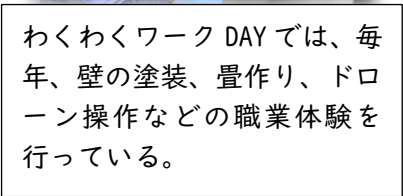
なかよしフラワー

昨年度の代表委員会をきっかけに、学校をよりよくするために、運営・集会委員会が主体となって、「なかよしフラワー」という取組を始めた。友達にしてもらって嬉しかったことや、感謝の気持ちなどを書き、掲示している。友達や自分のよさを見つめ直す機会となっている。

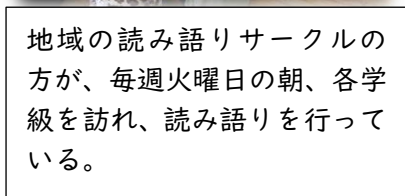


地域との関わり

本校では、地域の方々に協力いただき、様々な教育活動を行っている。地域の人に対する感謝の気持ちをもったり、地域の方に大切にしてもらっていることを実感したりする機会となっている。



5年生児童が、地域やJAの方に教えてもらいながら、田植え、稲刈りなどの米作りを行っている。



人権学習

学年・学級での人権学習

「子どもの権利条約」「ふわふわ言葉とちくちく言葉」「言い換え言葉」など、発達段階に応じた内容の学習を行った。児童が人権に関する知的理解を深める学習ができただけでなく、日常生活の中で意識し、実践しようとする行動が見られるようになってきた。



人権月間の取組

昨年度、「違いを認めるとは」をテーマとして、全校で人権学習を行った。事前に障がいのある人について考える学習を各学級で行った。当日は、車いすバスケットボールチーム「長崎サンライズ」の皆さんに来ていただき、プレーする姿を見たり、体験をしたりした。また、話を聞き、障がいのある人や多様性について深く考える機会となった。

今年度は、「障がいがある人についてもっと知ろう」というテーマで、地元波佐見町の方を招聘してお話をしていただいた。ご自身が生まれながら肢体不自由で、自分がその障がいにどう向き合ってきたか、自分の身の回りの人がどう接してくれたかを語られた。児童からは、障がいがある人に対してどう考え、どう行動したらいいのか深く考えることができた等の感想が寄せられた。

人権集会では、事前学習で作成した各学級の人権目標の発表、全校児童が作成した人権標語の優秀作品の紹介を行った。「南小人権の約束」は校内に掲示し、日常での意識を高めている。

各学級での事前学習後に、全校で人権学習を行い、人権集会を実施するという一連の過程を経ることで、児童の人権課題に対する知識・理解が深まり、実践への意欲の向上につながった。

掲示教育

ALT が担当している校内掲示板は、異文化理解の場となっている。そこに人権に関する内容も掲示している。

また、ほかにも、子どもの権利条約について紹介するものやアンケート形式にして児童参加型のものなど、掲示板の工夫を行った。児童参加型は、児童相互、児童と教師との会話の種となった。



ユニバーサルデザインの視点に立った環境整備

トイレのスリッパの色

本校では、男子トイレは青色や水色、女子トイレは赤色やピンク色のスリッパを使用していたが、どちらも混在させるようにした。



チョークの色

教室で使用するチョークについても、色覚に配慮し、カラーユニバーサルデザインの認証を受けているものに変更した。



生活目標の指導の工夫

毎月の生活目標を人権教育の視点から捉え直し、相手意識をもたせる言葉を追記した。校内掲示用のポスターも併せて作成し、校舎内各階に掲示している。

また、各学級で足並みを揃えて指導をすることができるよう、「指導のポイント集」を作成し、職員の共通理解を図った。このことにより、トイレのスリッパを並べる児童に対して、「えらいね。」ではなく、「あなたが並べてくれたから、次の人が助かるよ。」というように、児童の行動を掲示物と連携して価値付けられるようになった。



教職員の研修（児童理解・人権など）

西九州大学から講師をお招きし、「自己肯定感を育む教育～子どもを大事にするということ～」と題して講義を行っていただいた。この研究で大切にしていきたい児童の自己肯定感について、理解を深めることができた。

また、長崎大学大学院から講師をお招きし、本校で実施しているQ Uテストの活用についての研修を行った。これにより、分析結果をもとに児童理解を深めることができた。1学期と3学期にテストを実施したことで、学級経営を振り返る機会にもなり、教職員の指導力向上にもつながっている。

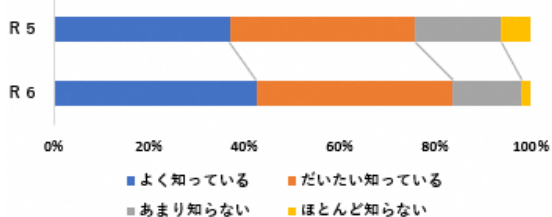
そのほか、職員の人権感覚の向上を目指した研修も行った。「アンコンシャスバイアス」「マイクロアグレッション」といった人権問題について学んだ。知識を得るだけでなく、演習を通して自分の人権感覚を改めて振り返ることができた。

これらの研修で得た知識は、教職員の児童理解及び学級経営の実践力向上になった。

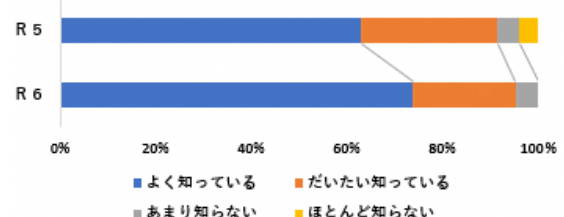
Ⅲ 研究の成果と課題

人権アンケートの結果（2～6年生） 〈令和5年9月と令和6年7月の比較〉

●自分にはよいところがあることを知っている。

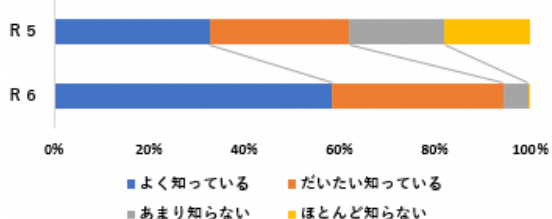


●自分以外の人にはよいところがあることを知っている。

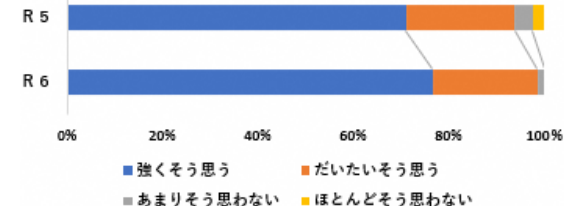


自他の大切さに関する項目では、特にこの2つにおいて大きな変化が見られた。どちらも、「よく知っている」と回答した児童の割合が多くなり、自己肯定感の高まりがうかがえる。また、友達のよさを見つけられるようになったと児童自身が感じていることが分かる。体験の事実等に関する「友達に、自分ががんばったことを認めてくれる」という項目でも、97.7%の児童が「ちゃんと認めてくれる」「だいたい認めてくれる」と回答しており、友達との関係の中で、安心感をもって過ごせていることがうかがえる。

●人権を守るためのきまりがあることを知っている。



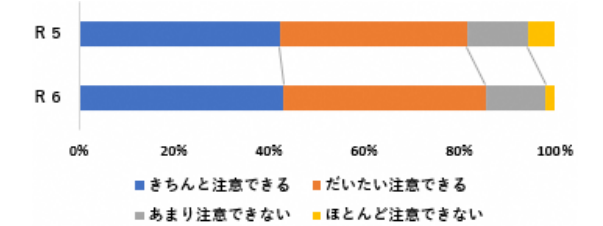
●人権の大切さをこれからも勉強した方がいいと思う。



人権の理解に関する項目についても改善が見られた。児童自身の人権に関する学びが深まっていることと共に、

その重要性を感じていることがうかがえる。

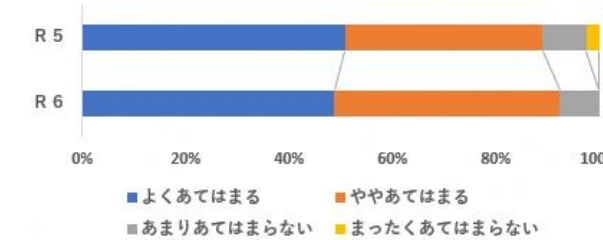
●友達が間違っていたら注意することができる。



この2項目については改善しておらず、自分の思いを伝えることについては依然として課題であることが明らかになった。本校の児童が、相手の気持ちを思いやりながらも、適切に自分の思いを話して伝える力を高めるためには、語彙力の向上とよりよい仲間作りが必要だと考えられる。

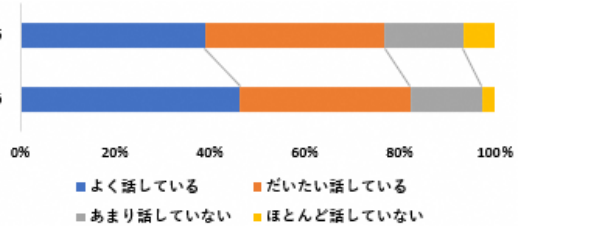
Q Uテストの結果

- 勉強ができるようになるとがんばっていますか。
- よい成績をとったり勉強ができるように努力している。



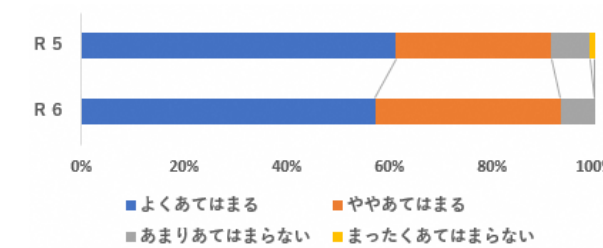
学びに向かう力の成長がうかがえる項目としては、上記のどちらのアンケートでも、これらの問いに対して「まったくあてはまらない」と回答した児童が0になった。「よくあてはまる」と回答した児童は減ったものの、児童が自信をもって学習に取り組むために欠かせない自己肯定感を高めることについては、一定の成果が表れていると考える。

●自分の考えや気持ちを、誰かによく話している。



学校評価アンケートの結果

- 授業では自分で考え、自分から取り組んでいる。



※R5年度Ⅰ学期とR6年度Ⅰ学期の比較

標準学力検査の結果（2～6年生） <令和6年度4月と12月の比較>

全国の平均正答率との差の変化で比較を行った。

国語科	2年	3年	4年	5年	6年
教科全体	+ 5. 2	- 0. 7	+ 4. 6	+ 2. 7	+ 4. 0
応用	+ 1 6. 3	+ 5. 7	+ 1 6. 0	+ 6. 4	+ 9. 5
書くこと	+ 1 7. 5	+ 4. 0	+ 1 4. 7	+ 4. 8	+ 1 6. 0

算数科	2年	3年	4年	5年	6年
教科全体	+ 3. 6	+ 4. 8	+ 7. 1	- 0. 8	+ 7. 1
応用	+ 1 1. 2	+ 5. 9	+ 5. 4	+ 3. 1	+ 1 5. 4
図形	+ 5. 1	+ 2. 2	+ 1 0. 4	+ 1 2. 3	+ 5. 2

教科全体で見ると、差が広がった項目もあるが、応用の分野においてはすべての学年で改善が見られた。「応用問題に消極的である」という本校児童の課題の一つにおいて、一定の成果が表れたと考えている。デジタルドリルの活用なども行ったため、本研究の「『学びに向かう力』を育む土壌づくり」の成果であるとまでは言えないが、教職員が児童一人一人を見取る力を高め、児童の実態に合った適切な指導や支援の積み重ねの表れであろう。特に改善すべき領域であった国語科の書くこと、算数科の図形について伸びが見られたことは喜ばしい結果であった。しかし、依然として全国平均を下回る項目も少なくなかった。

南小の児童がめざす姿にさらに近づくためには、仲間とのつながりを深める取組をはじめとした、共感的な人間関係の育成の継続が必要であると考えます。45分間の授業でも、児童が友達とのつながりを感じながら学ぶことができるよう、今後も人権教育の視点を大切にしながら支援していきたい。